

## 編集後記

和気会長による年頭所感は、混迷するわが国そして世界情勢の中で、改めて日本社会福祉学会の役割の重要性について会員に投げかけた重要な内容でありました。また、会長をはじめ、今期の役員から次期の役員へと課題をつないでいくべき内容の提示も行われました。会長が述べられたように、平和と民主主義の発展に、我々はどうのように貢献できるか、先人の歩みの学びから、いかに「智」と「対話」によって未来を切り拓くことができるかについて、会員とともに再考し、活動し続けることを改めて共有していきたいと考えます。

ここで改めて会員及び次期会員へつないでいく課題として、各委員会からの報告から提示をしていきたいと思えます。

国際学術交流促進委員会からは、韓国社会福祉学会及び東アジアフォーラムへの参加から、日中韓の共通的な課題である少子高齢化に係る課題が提示されました。また自由研究発表をされた早稲田大学の金先生からは、日韓の社会福祉政策・実践に資する知見の構築の必要性が述べられています。

地域ブロック情報では、東北地域ブロックから、2027年度秋季大会開催準備に向けて、開催校の負担軽減の必要性と地域社会にむけた学術情報発信の場としての役割について述べられています。関東地域ブロックからは、研究者・実践者・教育者が分野横断的に集まり、社会福祉学の理論・実践・政策を往還させながら探究し、社会保障、ソーシャルワーク、地域福祉、児童・障害・高齢・医療・貧困・司法福祉など幅広いテーマを扱い、多様な研究方法が交差する場の必要性が述べられています。

研究支援委員会からは、CS-NET (Creative Support Network) サロンの活動実績が報告されるとともに、初期キャリア研究者自身が主体的に企画を立案し、研究会やサロンを開催できる仕組みづくりの推進の必要性が提示されています。

広報委員会からは、広報委員会企画座談会の第4回の内容が報告されました。社会福祉学会が資格制度と学問の乖離、学会の関与の弱さ、世代間の認識差などが課題として共有され、専門職養成の在り方を学問的視点から再検討すべき課題として提示されています。

以上のように、さまざまな継続課題の提示がなされています。これらの課題に取り組み続け、本学会の発展につなげていくことが必要だと考えます。

片岡靖子(久留米大学)